



釜ヶ崎の新築マンションの町会費で悩んでいます

『なび』でも〈限界町会〉などと評して、都市のど真ん中で進行する自治機能の弱体化を指摘してきたが、その要因の一つが、賃貸高層マンションでの町会費の徴収問題だ。恥ずかしながら、わがブランコートの入居者の町会費徴収は無策に失した。苦肉の策として、ブランコートに隣接する長3公園でのながさん祭りを所属町会と共催することで、町会への参画を企てたが、まだまだミスマッチ状態だ。いろいろ思案しながらHPを検索していたら、お隣の天王寺区の賃貸マンションなどでは、契約条件に「共益費に町会費を含む」と記載していた。これは一計だと感心したが、背景は簡単なものじゃない。何故なら、天王寺区は、いまや大阪市域では最も人気の高い賃貸マンション圏域で、そこの町会に所属するというのは、きわめて好意的に受けとめられるようだが、わがインナー・シティ西成区などではそうはいかない。ボクは、町会費を共益費に含むという強気のビジネスに、指をくわえるだけだった。

ところで、わが(株)ナイスは、良きビジネスパートナーを得て、釜ヶ崎に念願の新築マンションを本年末の完成を目途に建設中である。ボクは今度は同じ失敗はしないと肝に銘じ

て、町会費問題の「対案」を模索中である。天王寺区に倣って、釜ヶ崎で、共益費に町会費を組み込もうと思っているのだが、さて、その瓢箪からどんな駒が飛び出すかだ。

新しいマンションは、あくまで、釜ヶ崎に居住する貧しい高齢者などのためのマンションで、ここからまちづくりを発信するつもりだ。新しければ良い、安ければ良いだけでは、次に繋がらない。(株)ナイスも釜ヶ崎に投資するが、入居者にも、なにがしらの投資を提案したい。その一つが共益費問題、町会費問題だ。いっそのこと「入居者組合」方式を採って、組合費とし、組合費がマンションに新鮮な「自治」を付加し、さらにまちへの「役立ち」を引き出せないだろうか、そんな駒を振り出せないものだろうか。

ボクのソーシャル・ビジネスは、たかが月300円程の町会費がテーマだから、お粗末に尽きる。でも、本人はいたって真面目である。インナー・シティにおける町会費問題、誰か、良い知恵ありませんか？追伸だが、このマンション、1・2階は、オフィス、商業スペースで、まちづくりの新たなパートナーを探している。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



アナログレコードの逆襲その24  
 中島みゆき「アザミ嬢のララバイ」／アルバム「私の声が聞こえますか」から



がましく、あるいは絶望を抱えてもがき、はたまた同志への応援歌を高らかに歌う。そして何よりもアバンギャルドであった。類まれなるミュージシャンとして今も孤高を保っている。

前号で浅川マキを紹介した。彼女の歌は中島ととてもよく似ている。歌のこぶしも、詩のシチュエーションも、ウラミつらみや情念のこもった歌いつぶりやブル―な雰囲気も。ただ浅川の歌はより以上に一人称的であつて、恋人に捨てられるか、別れるかを主題として、そのテーマの背景や怨念は極めて中島と近似しているのだが、浅川にはプライベートな印象が強い。いわば浅川の歌は浅川で完結する、というような。

さて中島の歌には「私」(プライベート)を歌うだけでなく「私たち」、「私にながる誰か」が強調されていて、それはアルバム最後を飾る『時代』にも濃厚に現れていた。

―めぐるめぐるよ 時代は巡る 別れと出逢いを くり返し 今日はいくら旅人たちも 生まれ変わって 歩き

出すよー。

このアルバムには中島のエキスが詰まっている。『時代』が清冽な陽画的応援歌といえるなら、A面最初の『あぶな坂』は視覚的メタファーでシニールに歌われ、『時代』の対をなす陰画的応援歌といえるだろう。

―今日も だれか 哀れな男が 坂を 転げおちる あたしは すぐ迎えに出かける 花束を抱いて(中略)遠いふるさとと 落ちぶれた 男の名を呼んでなどないのが ここからは見えるー。

これら曲の中間に “不特定な誰か” への語りかけともいえるリズムミックスな『アザミ嬢のララバイ』が収録されていて、僕は昔のこの曲と同じシチュエーションのあったことを思い出し、今もこの曲を聞くと大泣きをしてしまう。

―ララバイ ひとりで 眠れない夜は ララバイ あたしをたずねておいで ひとりで 泣いてちやみじめよ 今夜は どこからかけてるのー

中島みゆきの歌は一言でいえば変革の詩である。演歌的味わいを持ちながら、演歌と決定的に違うのは “あきらめない” こと、現状維持を拒み “どうせ世の中こんなもの” という道理を肯定しないことである。それはやはり新しいフォークというのが正しい。

個の存在に根ざし、あるいは女の情念を逆手に、社会の仕組みに同化させようとするなら、私はその仕組みから逸脱するよと強い自我で歌う。中島は、時代の隔絶感や不条理をテーマに、時には恨み